空の細道　©1980

昭和五十五年二月十八日　初版印刷
昭和五十五年二月二十五日　初版発行

著者　結城信一

発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　(〇三)四〇四―一二〇一〈営業〉
(〇三)四〇四―八六一一〈編集〉
振替　東京〇―一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

空の細道

河出書房新社

目次

空の細道　七
梢　三七
去年のこほろぎ
露のひろば　五五
灯り　一〇五
星月夜　一三三
去年のこほろぎ　一六九
＊
夏病み（あとがきに代へて）　二一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

素描　口絵　舟越保武
装幀　函　齋藤和雄

空の細道　結城信一短篇集

空の細道

一

夏の強い日差しが、やや前こごみの背中に、突刺さる。頭の芯をめぐつて、真赤な渦が盛りあがるやうで、ふらつくほどの眩暈(めまひ)がしてくる。……山形老人は庭の片隅で、もう三十分あまりもうづくまつてゐた。

小指の爪ほどの虫を見てゐたのだが、何の虫かはわからない。

漆のやうな黒い背を見せて、幅広の葉の端を、ゆつくりと歩いてゐる。歩くといふよりは、緩かな移動で、ときどき端から、木洩れ日の縞目のなかに、揺れ落ちさうになる。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

《……どこへ行くつもりか……》

しかしそれが、三十年前の佳子の、化身のやうに山形老人には見えてくる。

これまでにも、化身と思つて見たものは、幾度となくある。そのつど、きびしい眉を寄せたものだが、やがて、草木虫魚ことごとく、時と場合に従つて何かの化身である、と思ふやうになつてきてゐる。

死者からの便りが、ときどき聞えてきた。その前触れは、りんりんと耳の奥で鳴つた。

三十年前と言つても、今の山形老人にとつては、二十五年前も、また遠い四十年前も、みなおなじ三十年前の「過去」で、「すべてが三十年前」といふ具合になつた。振向いても、さまざまに岐れた過去への道が、はつきりと見えるわけではない。涯しなく広く、黒い海原が背にひろがつて、そのまま山形老人を、呑みこんで行きさうだ。

戦争が終つて何年も経たぬころ、身の周りで、葬列がつづいた。食べるものに乏

しく、それぞれ、病みがちになつた。はじめに妻、それから一人娘の秋子が、あつといふ間に鬼籍にはひつた。

今になれば、

《……送りとどけてやつたやうなものか……》

思ひが、そんなふうになることもある。

娘はときどき、お菓子の折などを持つて、ふいと遊びにやつてくる。食事を一緒にすることもあれば、お茶だけ飲んで帰つてゆくこともある。やうやく訪れてきた、共通の飲食の愉しさが甦つてくる。帰るときは、玄関の格子戸のところで、戸を半分だけあけ、振りむきざま片手を軽く左右にふり、「ぢや、またね。元気で、ね」と十六歳の、すこし淋しげな笑顔で言ふ。

やがて、夢だ、いつも十六歳なんだ、とわかることに怯えてくる。こちらの方は薄暗い家の中で、しかし、やはり片手をあげ、掌を扇のやうにひらいて軽く振りながら、それに答へる。あとの侘しさが、既に前の方に出てゐて、今度いつ逢へるか

曖昧な別れの時に似てくる。

……そんなふうの別れ方がいつからか定着してゐて、ある瞬間、突風に煽られでもしたやうに、ぱつと眼があく。一人暮らしの部屋の、下の方からギリギリと鳴る椅子に凭れてゐると、また夢が戻つてきさうで、急速に哀愁が募つてくる。暁の光が、黄昏に見えてくる。りんりんと耳の奥で鳴る、と感じたのは、古くなつて脚のどれか一本が折れさうな、この窮屈な椅子の音か、と思つたりもした。

《……それぱかりではあるまい。七十を過ぎた老人の一人暮らしなどといふものは、淋しい、辛い、もあるが、もう、ほとほと疲れはてた。あれは、その疲れの音か……》

毎朝、眼がさめるごとに、呟いてきた。

死者は訪ねてくるが、生きてゐる息子の方は、一向に顔を見せない。便りもない。

クリスマスのパーティで知合つたといふ娘を連れてくると、どこか軀が痒さうな、居心地のわるさうな面持で、これと結婚したいと言ひだした。山形老人は両方の神

妙な表情を見較べたあと、簡単に許して、式も挙げてやつた。

男の子供が生れたが、この母子二人も、はじめのころ二、三度来ただけで、あと訪ねては来ない。

十五年前に停年を迎へたとき、息子を呼んで退職金の一部をあたへた。口髭を蓄へた息子は、小切手を無造作に内側のポケットに入れると、長い脚で帰つて行つたが、ここで一区切りついた、とでも言ひたげに見えた。

息子を呼んで小切手を渡したのは、自分自身、いつ死ぬかもわからぬ、といふ含みからであつたのが、今になれば、その自分の方が滑稽に見える。

息子の足音と、そのときの会話とが、棘になつて未だに残り、しばしば、悪熱に侵されたやうに、山形老人の胸のをさまりがわるくなる。

「オヤヂはあと、いくら頑張つたところで、二十一世紀までは持たないな」

息子の言ひかたに、冗談とは取れぬひびきがあつた。

「あたりまへだよ。だが、そんなあたりまへのことを言ふにしても、考へてものを

言ふもんだ」
「あたりまへなら、そのあたりまへが、どうしてわるい」
山形老人は駭いた。こんな逆襲に出会ふとは、思つてもみなかつた。
その理由がわからぬままに、
「わるいなどと、言つてはをらん。なにを、急に、ばかな……」
「恩着せがましいといふ感じだな、今日のところは」
「ばかげたことを、言ふな」
……息子の口髭を睨み、叱りつけた具合になつたが、子供から逆に、親の方が絶縁された、と山形老人は思ひつづけてきた。
《……息子が何を考へてゐるのか、息子の家内が、何を考へてゐるのか。……この十五年間だけのことにしても、夢まぼろしではないか、あの二人は共同歩調で、うまく遠ざかつて行つたといふことか。死者からの便りはあるが、生きてゐるものたちは、みごとに逞しく、この自分から離れてゆく……》

二

秋子が持つてくる菓子の中身が、山形老人には終始わからなかつた。気がつくと、いつのまにかそれは消えてゐる。

疑念に取憑かれてゐると、幽界から白日の下に飛び出たかのやうに、くらくらしてくる……。

学校の同級生を何人も、娘は父親に紹介した。死を予知してゐたらしい娘は、父親を慰めたかつたのか。花園のやうな十六歳の娘たちから、優しい親切をもらつてゐたやうに思ひだされてくる。

《……こちらも、まだ若かつた、春と初夏とが手を組んで訪れたやうな季節だつた、あのころ……》

佳子を、知つた。娘の友だちである。娘が死んだあとも、佳子はしばしば訪ねてきた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook